

源氏物語絵巻の詞書と絵画を活かした古典指導の研究 —「蓬生」の場面を中心にして—

A Study on Teaching Classical Literature Using Explanatory Notes and Illustrations from the Tale of Genji Scrolls : Focusing on the “Yomogiu” Chapter

山 田 丈 美¹⁾
Takemi YAMADA

抄録：源氏物語絵巻の詞書は、源氏物語本文を要約または切り取るなどして、後に続く絵画場面の先行的な言語情報を提供する役割を果たしている。他方、絵巻の絵画は、象徴的な場面を選び取って視覚的イメージを受け手に提供する。本研究では、このような源氏物語絵巻の詞書と絵画の特質を活かした古典指導のあり方を「蓬生」の巻を中心に検討した。検討の結果、絵巻の絵画、詞書、物語本文の順に描写される場面と内容が多くなることに着目し、絵巻の絵画による視覚的な全体構造の把握を起点として、詞書、源氏物語本文へと内容的に読み深めていく指導過程を提案した。

キーワード：古典教育 源氏物語絵巻 詞書 絵画 蓬生

1. 研究の背景

2018年（平成30年）の高等学校学習指導要領の改訂では、国語科で科目名に「古典」を冠するのは従前の「古典A」「古典B」から「古典探究」1科目のみとなり、2022年度から年次進行で実施されている。「古典探究」は伝統的な言語文化に関する理解をより深めるため設定された科目である。共通必修修科目の「言語文化」は上代から近現代につながる我が国の言語文化への理解を深める科目として古典が扱われるが、横井（2019）は、「古典探究」を選択しなかった場合、古典文学を教材とした授業が表面的で浅薄なものにとどまってしまうと述べている。また、渡部（2018）は、「古典探究」について、「より詳細になり、より踏み込んだ指導が求められている」と指摘している。新たな科目の枠組みの中で、古典教育の在り方が問われている。

中央教育審議会答申（2016）において、高等学校では「古典に対する学習意欲が低いこと」が課題として示されている。この原因の一つとして、現代語との時間的・感覚的隔たりがある古語・古文を言葉によって、言葉で理解させる指導方法が続けられてきたことがあると考える。

迎山（2022）は、ヒトの生み出す芸術について述べる中で、「文字は文字で意味とつながりすぎてしまったが、絵画は文字が捨ててしまった特性をまだ残している。そ

れは感情を表現できることだ」と述べている。文字は意味とつながり内容を伝えるが、絵画は直感的にイメージを提示して感情を喚起させる。迎山（2022）の言葉を借りれば、現在の古典教育は古語を現代語で解釈する方向での指導が中心であり、「文字は文字で意味とつながりすぎてしまった」状況にあるとも推察される。そこで、「文字が捨ててしまった特性」を残し、「感情を表現できる」絵画を取り入れることで新たな古典指導の可能性を探りたい。

本研究が対象とする源氏物語は、紫式部によって11世紀初めに執筆され、12世紀中期ごろから源氏物語が絵画化されたと推定されている。物語の成立後約1世紀後に絵画化され、それが今に至るまで受け継がれてきたという歴史的な文脈を古典教育においても重視したい。

中村（1954）は、絵巻という形式に於いて、絵がその内容としての制約を受けると同時に、「物語が如何にして次元の異つた絵画と結ばれて行くかといふ問題」を提起している。また、秋山（2000）は、本来空間的な芸術形式である絵画に、時間という要素が導入されてくると言い、時間的、つまり文学的な要素を、絵巻物の画面構成に結びつけるための、もっとも直接的な方法は、各画面に対する説明の文章を文字として記入する詞書であると述べている。このような絵画と言語の性格をあわせもつことに源氏物語絵巻の特徴がある。

1) 教育学部子ども教育学科

資料1 源氏物語絵巻「蓬生」場面の詞書

うつきはかりには□ちる□ ほしいてたま□しのひて いてたまふひろふりつるな こりのあめすこしそ、きて えむあるほとゆふ□く□よに みちのほとよろつのことおほし いて、おはす□るに□かた□な□あ たるいゑのこたちしけきを すきたまふおほきなるまつにふち のさきかゝりてつきかけになよあ ひたるにやなきもいたくしたりて ついひちもさはれらねはみたれ ふしたりみしこ、ちするかな とおほすははやこのみやなり けりれいのこれみつはかゝる御しの ひありきにおくれねはさふらひ けりいれてたつねさせたまへ はめくるくゝいりて人のおとする かたやあるとみるに月あかく さしいりたるにみれはかう しふたまはかりあけてすた れおこくけしきなりわつかに	みつけたるこ、ちおそろしくさ へおほゆれとよりてこはつく れはいとものふりたるこゑに てまつしはふきをさきに たて、かれはなに人そといふこゑ いたうねひすきにたれとき、しお ひと、き、しりにけりくつしいて、 とはすかたりもしつへければよ しくゝとてまつかうなむときこえむとて まいりぬなとかひさしかりつるむかし のあともみえぬよもきのしけさかなと たまへはしかゝなむとありさまきこ ゆいみしくあはれにてかゝるしけきの なかになにこ、ちしてすくしたまふ らんいま、てとはさりけるよとわか 御心のなさけなさもおほし、らる たつねでもわれこそとはめ みちもなくふかきよもきの もとのこゝろを とひとりこちてなを、りたまへは 御さきの露をむまのふちして うちらはひつ、いれたてまつるあま そ、きもあきのしくれめきて うちそ、けは御かさにさふらふけに このしたつゆはあまにまさりて ときこゆ
---	---

2. 目的

本研究では、源氏物語絵巻の詞書と絵画との対照、源氏物語本文との関係性について考察し、それをどう古典指導に位置づけ活かしていくかを検討したい。それにより、言葉を言葉で説明・理解させる古典指導から、言葉のみでなく絵画を活かして現代の学習者が直接古典と対話できる古典指導の在り方へと可能性を広げられる提案をすることが本研究の目的である。

3. 方法

本研究では、源氏物語第15巻の「蓬生」の場面を扱うことにする。源氏物語絵巻の詞書と絵画については、『新版 徳川美術館蔵品抄②源氏物語絵巻』（徳川美術館、1995）をもとにする。源氏物語本文については、『古典セレクション 源氏物語⑤』（阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男 校注・訳、1998）（小学館）をもとにする。「蓬生」は蓬が生い茂っている荒果てた所を指す。源氏物語の「蓬生」の巻では、源氏が須磨・明石の流浪の時期を経て帰京した後、長く忘れ去っていた末摘花の荒廃した邸を、ある日通りかかってそこであると思ひ出し、急遽、訪ねる。いわゆる吹抜屋台の場面構成とは違い、屋外の人物の動きがある象徴的な場面となつて

いる。絵巻の詞書と絵画との対照により、時・場所・人物の動き（行動）と心情をより鮮明なイメージをもって読み取らせたい場面である。源氏物語絵巻では、一般的に詞書が先で絵画が後に続く。

そこで、本研究では蓬生の場面について、以下の手順で検討する。

- (1) 源氏物語絵巻「蓬生」詞書の読み取り
- (2) 源氏物語絵巻「蓬生」絵画の読み取り
- (3) 源氏物語「蓬生」本文の読み取り

以上の(1)～(3)の検討の結果をもとにして、「蓬生」場面の指導過程について考察する。

4. 結果

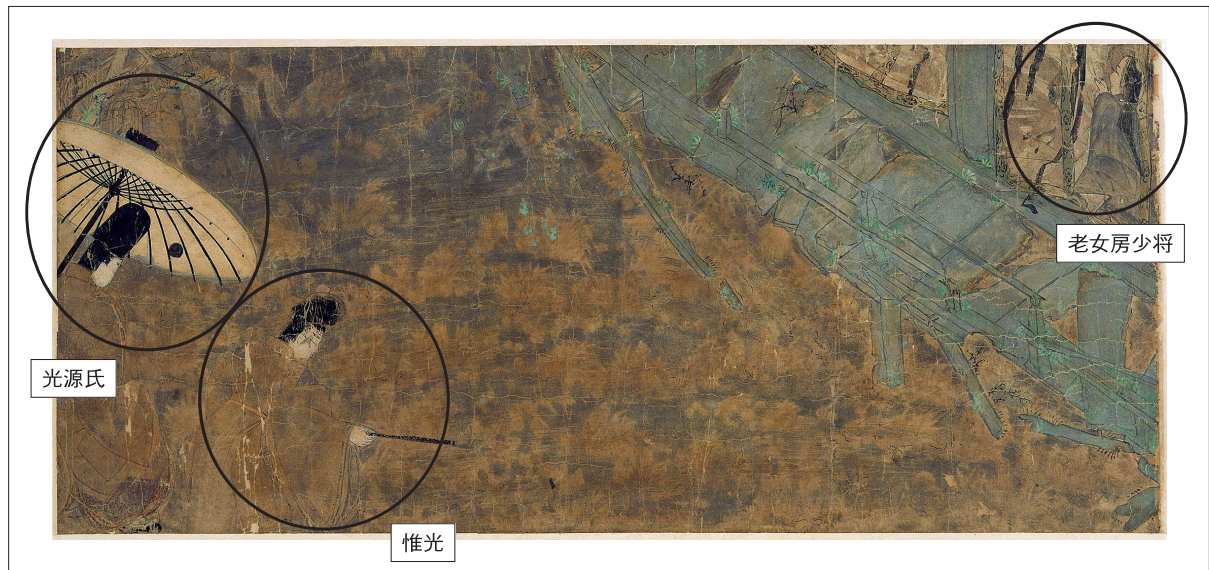
(1) 源氏物語絵巻「蓬生」詞書の読み取り

表1には、「蓬生」場面の詞書（資料1）に句読点や漢字表記を用いて書き改めた釈文（徳川美術館、1995）を掲載した。釈文の旧字体は新字体に書き改めた。便宜上、釈文の各文に丸数字の文番号を付した（以下、丸数字は文番号）。また、物語の設定として重要な柱となる「時」「場所・場面」「人物」「心情」にかかわる語句を釈文から抜き出してそれぞれの列に記載した。

ここで、表1に示した「時」「場所・場面」「人物」「心情」について、詳しく見ていくことにする。

資料2 源氏物語絵巻「蓬生」場面の絵画

※丸枠と人物名は筆者による



〔作品名〕源氏物語絵巻―蓬生 絵

徳川美術館所蔵 © 徳川美術館イメージアーカイブ/DNPartcom

a. 「時」

「時」に関する語句には、【卯月】【日頃】【夕月夜】【久し】【昔】【今】【秋】等がある。時期は【卯月】と示され、陰暦の4月であり、季節としては夏にはいる。他方、この場面での雨の降り方が、【秋】の時雨めくとして、比喩的・対比的に表現されている。一日のうちの時間帯としては、【夕月夜】の言葉から夕方ということが分かる。この場面での経過時間については、邸の外で待っていた源氏が、邸の中へ入って戻ってきた惟光へ問いかけた言葉「などか久しかりつる」の【久し】に表れている。他方、この邸およびこの邸の女主人である末摘花とのかかわりが、【昔】と【今】という時間を表す言葉により過去と現在との対比で示されている。

b. 「場所・場面」

次に「場所」に関する語句を続いて見ていくことにする。【道】【形もなく荒れたる家】【木立】【宮】【かかる繁き野中】等がある。【道】は忍び歩きのだである。そこで目に入ってきた【形もなく荒れたる家】【木立】の様子に、【宮】すなわち宮邸（常陸宮邸）であることに気づく。その宮邸は、源氏が【かかる繁き野中】と表現するほどの荒れようであることが描写されている。場面の様子を具体的にイメージさせる語句として、【形もなく荒れたる家】【木立】【宮】【大きな松】【藤】【柳】【築土】【蓬】などがある。それらが、以下のように描写されている。

【藤】…【大きな松】に咲き懸かりて、月影になよびたる (③)

【柳】…いたく垂りて (③)

【築土】…さはれらねば、乱れ伏したり (③)

以上の人の手が入っていない荒れた邸の光景を目にし

た光源氏は、「見し心地するかな、と思す」(④)のである。また、邸内の蓬を見て源氏が発した言葉が以下である。

【蓬】…(源氏) 昔の跡も見えぬ蓬の繁さかな (⑨)

以上のように、登場人物の源氏や惟光の目に映った邸の様子が描かれている。【蓬】については、源氏物語本文では、「しげき蓬は軒をあらそひて生ひのぼる」との一節があり、軒と争うほどの高さまで生えてのぼっていると描写されている。

c. 「人物」

「人物」については、詞書本文に具体的に人物名が書かれているのは【花散里】(一部不鮮明な文字あり)と【惟光】である。【花散里】は実際に登場するわけではなく、忍び歩きの当初の目的を説明するために触れられたのにすぎない。この他、詞書本文には人物名が具体的に書かれず、【聞きし老人】との人物が登場する。釈文中に補足的に括弧書きで(老女房少将)と書かれている。また、詞書では、光源氏についても人物名が書かれておらず、釈文中で補足的に(源氏)と書かれている(本稿ではこれ以降、便宜的に【老女房少将】【源氏】と表記する)。

ここで、【老女房少将】の様子や行動を表す語句に具体的に着目してみたい。

【老女房少将】…いともの旧りたる声、先づ咳を先に立てて、いたうねび過ぎにたれど(⑦)、くづし出でて、問はず語りもしつべければ(⑧)

以上の【老女房少将】の老人然とした特徴的な描写は、以前源氏がこの邸に来た頃からの時間的経過とそれに伴う少将の老いを語るものでもある。この老女とのかかわりを含めて、【惟光】と【源氏】の行動に着目すると、以下のことを読み取ることができる。

表1 国宝「源氏物語絵巻」蓬生場面の詞書釈文

文 番 号	詞書釈文 太字=時、場所・場面、人物、下線=心情	時	場所・場面	人物	心情
①	卯月ばかりに、 <u>花散里を思し出で給うて</u> 、忍びて出で給ふ。	卯月		花散里	【源氏】花散里を思し出で給うて
②	日頃降りつる名残の雨少し注ぎて、艶ある程の夕月夜に、 <u>道の程よろづの事思し出でておはするに、形もなく荒れたる家の、木立茂きを過ぎ給ふ。</u>	日頃 夕月夜	道 形もなく荒れたる家 木立		【源氏】道の程よろづの事思し出でておはするに
③	大きな松に藤の咲き懸りて、月影になよびたるに、柳もいたく垂りて、 <u>築土もさはれらねば、乱れ伏したり。</u>		大きな松 藤 柳 築土		
④	<u>見し心地するかな、</u> と思すは、はやこの宮なりけり。		宮		【源氏】見し心地するかな、と思す
⑤	例の、 <u>惟光</u> はかかる御忍び歩きに後れねば、侍ひけり。			惟光	
⑥	入れて尋ねさせ給へば、廻る廻る入りて、人の音する方やあると見るに、月明くさし入りたるに見れば、格子二間ばかり上げて、簾動く気色なり。				
⑦	わづかに見つけたる心地、恐ろしくさへ覚ゆれど、寄りて声づくれれば、いつもの旧りたる声にて、先づ咳を先に立てて、(老女房少将)「かれは何人ぞ」と言ふ声、いたうねび過ぎにたれど、 <u>聞きし老人と聞き知り</u> にけり。			老女房少将 聞きし老人	【惟光】わづかに見つけたる心地、恐ろしくさへ覚ゆれど
⑧	くづし出でて、問はず語りもしつべければ、(惟光)「よしよし」とて、(惟光)「先づかうなむと聞えむ」とて参りぬ。			惟光	
⑨	(源氏)「などか久しかりつる。 <u>昔の跡も見えぬ蓬の繁さかな</u> 」と宣へば、(惟光)「しかじかなむ」と有様聞ゆ。	久し 昔	蓬	源氏 惟光	【源氏】昔の跡も見えぬ蓬の繁さかな
⑩	いみじくあはれにて、(源氏)「 <u>かかる繁き野中に、何心地して過し給ふらん。</u> 」		かかる繁き野中	源氏	【源氏】いみじくあはれにて 【源氏】かかる繁き野中に、何心地して過し給ふらん
⑪	<u>今まで問はざりけるよ」と、わが御心の情なさも思し知らる。</u>	今			【源氏】今まで問はざりけるよ 【源氏】わが御心の情なさも思し知らる
⑫	(源氏) <u>尋ねても我こそ問はめ道もなく深き蓬のものと心を</u> とひとりごちて、なほ下り給へば、御さきの露を、馬の鞭してうち払いつつ、入れ奉る。		蓬	源氏	【源氏】尋ねても我こそ問はめ道もなく深き蓬のものと心を
⑬	雨注ぎも、秋の時雨めきて、うち注げば、(惟光)「御傘にさぶらふ。げに木の下露は、雨にまさりて」と聞ゆ。	秋…め きて		惟光	

【惟光】…かかる御忍び歩きに後れねば、侍ひけり (⑤)、廻る廻る入て、人の音する方やあると見るに…… (⑥)、わづかに見つけた心地、恐ろしさへ覚ゆれ (⑦)、寄りて声づくれ (⑦)、(【老女房少将】を) 聞きし老人と聞き知り (⑦)、(【老女房少将】へ) 「よしよし」とて (⑧)、(【源氏】へ) 「先づかうなむと聞えむ」とて参りぬ (⑧)、(【源氏】へ) 有様聞ゆ (⑨)、御さきの露を、馬の鞭してうち払いつつ、入れ奉る (⑫)、(【源氏】へ) 御傘にさぶらふ (⑬)

【源氏】…(【惟光】を邸内に) 入れて尋ねさせ給へば (⑥)、わが御心の情なさも思し知る (⑪)、(歌) とひとりごちて、なほ下り給へば (⑫)

読者は、【惟光】とともに荒れ果てた邸内に恐る恐る足を踏み入れる緊張感をもって読み進めることになる。それとともに【惟光】の人物像も理解することができる。【老女房少将】との距離感の取り方や対応も手慣れたものであり、主人の【源氏】への報告や気遣いも行き届いている。そのような【惟光】を【源氏】が重宝して使っている様子が伺える。源氏に遣わされて邸内を探索し、再び源氏の元へ戻って事の顛末を報告する【惟光】の一連の行動にかかる時間的経過を読者は共体験することになる。【惟光】が邸内に足を踏み入れ、そこで会った【老女房少将】の様子については詞書に描かれている。しかし、女主人である末摘花については全く描かれていない。

d. 「心情」

【源氏】については、心情面も書かれている。「いみじくあはれ」(⑩)「わが御心の情なさ」(⑪)、という自分自身の心情とともに、「何心地して過し給ふらん」(⑩)、「(歌) 道もなく深き蓬のもとを」(⑫)のように、末摘花の心を推し量る思いが書かれている。しかし、その対象であり、重要人物であるはずの末摘花について、詞書では全く触れられていない。邸内での【老女房少将】の様子が具体的に描かれていることは対照的である。【源氏】の「かかる繁き野中に、何心地して過し給ふらん」との末摘花の暮らしぶりや心中への推察に対し、それにこたえるような末摘花に関する具体的な文言が詞書には全くない。他方、源氏物語本文の「蓬生」の巻では、末摘花の様子や心情が具体的に書かれている。したがって、源氏物語絵巻の詞書だけでは解決できない疑問を源氏物語本文により読み取って解決していくことも想定できる。

(2) 源氏物語絵巻「蓬生」絵画の読み取り

国宝「源氏物語絵巻」の「蓬生」の絵画は、画面中央に【蓬】が広く描かれていることが特徴である。しかし、源氏物語本文の「しげき蓬は軒をあらそひて生ひのぼる」ほど高くは描かれてはおらず、地面一面に低く生えている様子が描かれている。画面左上には、表1に示した詞書積文の文番号③「大きな松に藤の咲き懸りて」の光景が描かれている。さらに画面右には、壊れ果てた邸の

簀子縁の板と室内の一部分が描かれている。また、人物については、様子や行動の観点から、表1における文番号⑫⑬の以下の場面を描いたものであるといえる。

⑫【源氏】……なほ下り給へば、

【惟光】御さきの露を、御さきの露を、馬の鞭してうち払いつつ、入れ奉る

⑬【惟光】(【源氏】へ)「御傘にさぶらふ。げに木の下の露は、雨にまさりて」と聞ゆ。

以上の【源氏】と【惟光】の様子や行動が、絵巻の画面左端やや下の位置に描かれている。【源氏】の上には、【傘】が差し掛けられている。また、右上の壊れ果てた邸の中には、表1の文番号⑦⑧で説明された【老女房少将】の姿が描かれている。以上のように、描かれている人物は【源氏】【惟光】【老女房少将】の3人であり、詞書と同様に末摘花は描かれていない。

(3) 源氏物語「蓬生」本文の読み取り

(1)(2)で見てきたように、国宝源氏物語絵巻の「蓬生」場面の詞書にも絵画にも「末摘花」本人は描かれていない。他方、源氏物語本文の「蓬生」巻にはその暮らしぶりや末摘花の心情が事細かに描かれている。表2では、源氏物語『古典セレクション 源氏物語⑤』小学館)の蓬生巻本文中の末摘花にかかわる見出しを左列欄に示した。中央列欄は国宝「源氏物語絵巻」の詞書、右列欄は国宝「源氏物語絵巻」の絵画とし、左列欄の「源氏物語」本文中の見出しの内容を取り扱っている場合に○を付した。表2のように、国宝「源氏物語絵巻」の絵画では「源氏、惟光に導かれて邸内に入る」の場面のみが描かれている。表1に示した国宝「源氏物語絵巻」の詞書の内容は、表2の源氏物語本文の見出しに照らし合わせると、「源氏、末摘花の邸のそばを通りかかる」「惟光、邸内を探り、ようやく案内を請う」「源氏、惟光に導かれて邸内に入る」の見出しの内容に相当することになる。

源氏物語本文では、国宝「源氏物語絵巻」の蓬生の場面の絵画や詞書からでは何い知れない末摘花の暮らしぶりや人となりを読み取ることができる。以下に、「源氏物語」蓬生巻本文中の見出しとそれに対応する源氏物語本文の抜粋3例を示す。

見出し (2) 「末摘花の邸ひたすら窮乏し、荒廃する」

常陸の宮の君は、父親王の亡せたまひにしなごりに、また思ひあつかふ人もなき御身にていみじう心細げなりしを、思ひかけぬ御事の出で来て、とぶらひきこえたまふこと絶えざりしを、いかめしき御勢ひにこそ、事にもあらずはかなきほどの御情ばかりと思したりしかど、待ち受けたまふ袂の狭きに、大空の星の光を盥の水に映したる心地して過ぐしたまひしほどに、かかる世の騒ぎ出で来て、なべての世うく思し乱れし紛れに、わざと深からぬ方の心ざしはうち忘れたるやうにて、遠くおはしましにし後ふりはへてしもえ尋ねきこえたまはず。そのなごりに、しばしは泣く泣くも過ぐ

表2 蓬生巻における描写場面

巻名	「源氏物語」蓬生巻本文中の見出し	国宝「源氏物語絵巻」詞書	国宝「源氏物語絵巻」絵画
蓬生	(1) 源氏謫居の間、人々ひそかに嘆き悲しむ		
	(2) 末摘花の邸ひたすら窮乏し、荒廃する		
	(3) 末摘花、荒れまさる邸を守り生きる		
	(4) 末摘花、時代離れの古風な日常を過す		
	(5) 叔母、末摘花に対して報復を企てる		
	(6) 叔母、西国へ同行を勧誘、末摘花拒む		
	(7) 末摘花の絶望 叔母来り侍従を連れ去る		
	(8) 末摘花の邸、わびしく雪に埋もれる		
	(9) 源氏、末摘花の邸のそばを通りかかる	○	
	(10) 惟光、邸内を探り、ようやく案内を請う	○	
	(11) 源氏、惟光に導かれて邸内に入る	○	○
	(12) 末摘花、源氏と対面、和歌を唱和する		
	(13) 源氏、末摘花を手厚く庇護する		
	(14) 末摘花、二条の東院に移り住む		

注1)「源氏物語」本文中の見出しは『古典セレクション 源氏物語⑤』（小学館）による。見出し番号の漢数字を算用数字にした。

注2) 絵巻の詞書・絵画の欄には、源氏物語本文中の見出しの内容を取り扱っている場合に○を付した。

したまひしを、年月経るままにあはれにさびしき御ありさまなり。(pp.13-14)

ここでは、末摘花の境遇と暮らしぶりの変化、その変化に伴う心情が描かれている。父は常陸宮(親王)であったが、その父が亡くなってからは「いみじう心細げなりし」との境遇であった。しかし、源氏の庇護を受けるという「思ひかけぬ御事」ができ、「待ち受けたまふ袂の狭きに、大空の星の光を盥の水に映したる心地して過ぐしたまひし」というほどの望外の境遇となった。しかし、源氏の須磨明石への退去という「かかる世の騒ぎ」が起きた後は末摘花への音沙汰はなく、「しばしは泣く泣くも過ぐしたまひし」状態であり、年月が経てもその状態に変化はなく「あはれにさびしき御ありさまなり」と描かれている。「心細げなりし」「心地して過ぐしたまひし」「泣く泣くも過ぐしたまひし」など、末摘花のこれまでの境遇と心情の説明として、文末表現には過去の意味を添える助動詞「き」の連体形「し」が使われている。「あはれにさびしき御ありさまなり」には、過去の助動詞が付いておらず、現在にも続く状態であることが推察される。

見出し (3)「末摘花、荒れまさる邸を守り生きる」
もとより荒れたりし宮の内、いと狐の棲みかになりて、うとましう、気遠き木立に、梟の声を朝夕に耳ならしつ、人にこそ、さやうのものもせかれて影隠しけれ、木霊など、けしからぬものども、所得て、やうやう形を現はし、ものわびしきことのみ数知らぬ…… (p.16)

上記は、源氏の庇護がなくなり、生活が困窮を極める状況が描かれている箇所である。「宮の内」にもかかわらず、「狐の棲みか」「梟の声」「木霊」などが登場し、「ものわびしきことのみ数知らぬ」と形容される。「ものわびしき」は、邸の状態であるとともに末摘花の心情でもある。

見出し (6)「叔母、西国へ同行を勧誘、末摘花拒む」
今は限りなりけり。年ごろ、あらぬさまなる御さまを、悲しういみじきことを思ひながらも、萌え出づる春に逢ひたまはなむと念じわたりつれど、たびしかはらなどまで喜び思ふなる、御位改まりなどするを、よそにのみ聞くべきなりけり。悲しかりし折のうれはしさは、ただわが身一つのためになれるとおぼえし、かひなき世かな」と、心くだけで、つらく悲しければ、人知れず音をのみ泣きたまふ。(pp.26-27)

源氏の庇護が得られなくなり困窮し、再びの来訪も望めぬまま「今は限りなりけり」と語られる。末摘花にできることといえば、「心くだけで、つらく悲しければ、人知れず音をのみ泣きたまふ」ことだけである。この引用箇所だけでも、「悲しういみじきこと」「悲しかりし折のうれはしさ」「心くだけで、つらく悲しければ」と「悲し」が3回使われている。末摘花の絶望の様子を読み取ることが出来る。しかし一方、この時点で、源氏は末摘花のことを全く念頭に置いていない。源氏物語絵巻の蓬生の場面では、その源氏が常陸宮邸を偶然に通った際の出来事が書かれているのである。

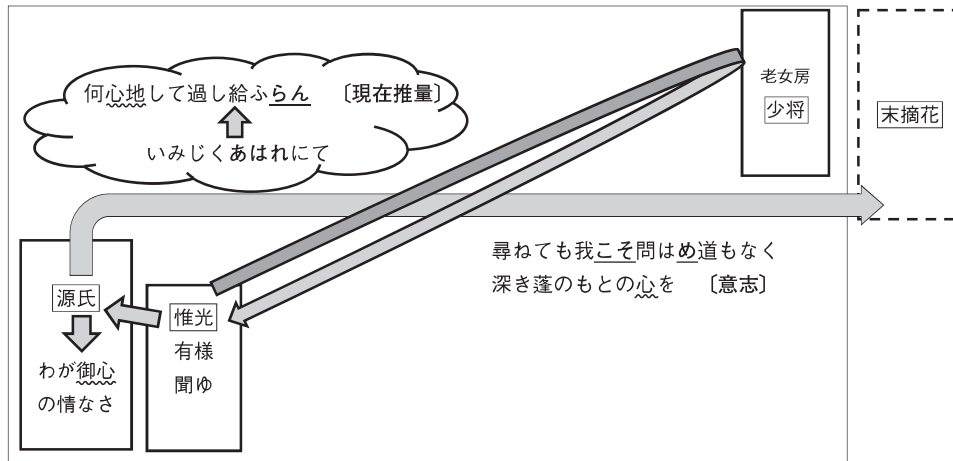


図1 「蓬生」場面の人物関係図

※「末摘花」は紅花の異名。赤い花が咲く。巻名、人物名として使われている。

5. 考察

ここでは、「4. 結果」の(1)～(3)をもとにして、源氏物語絵巻の詞書・絵画と源氏物語本文を活用した古典指導の展開について検討する。

(1) 古典指導における源氏物語絵巻の詞書・絵画と源氏物語本文の位置づけ

表1に示した通り、国宝「源氏物語絵巻」の詞書（釈文）からは、時、場所・場面、人物、心情を読み取ることができる。他方、国宝「源氏物語絵巻」の絵画からは、主に、場所・場面および人物の行動を読み取ることができる。一般的に、絵画は平面上の表現であるため、一枚の絵画から時の経過や心情の変化を読み取することは難しい。文章はそれを表現することができる。絵巻は詞書と絵画との組み合わせによって成っており、両方をうまく活用して理解を深めていくことが可能となる。

図1は国宝「源氏物語絵巻」の蓬生場面の人物の位置関係をもとにした図である。さらに、矢印によって時間の経過を表現し、心情面での情報を文字によって書き加えた。いわば、絵巻の詞書と絵画を重ね合わせたような図になる。惟光から発した矢印はまず、老女房少将に向かい、戻ってくる。その後、源氏に対して報告をする矢印の後、源氏的心情面での矢印がその場にはいない末摘花に向かい、「いみじくあはれにて」「何心地して過し給ふらん」との言葉になる。「らん」という現在推量の助動詞から、源氏が俄かに末摘花を案じる心情が読み取れる。同時に、「わが御心の情けなさ」として源氏の矢印は自分自身へと向かう。この矢印は、心情面での矢印である。それらを総合した表現が「尋ねても我こそ問はめ道もなく深き蓬のものと心を」の和歌である。「…こそ～め」という表現により、深い蓬が生い茂っている道もない末摘花の邸を訪ねようという源氏の意志が強調されている。そして、源氏が末摘花の邸へと向かう行動としての矢印となる。この場面が国宝「源氏物語絵巻」の蓬

生場面の絵画となっている。

ここで改めて強調したいのは、絵画・詞書ともにかかれている人物は源氏・惟光・老女房（少将）の3名であり、末摘花は描かれていない点である。この点が、源氏物語本文との大きな相違点である。この点について、玉上（1960:74）は、以下のように述べている。

詞書は、この末摘花の姫君一世一代の思い入れの段をあえて省略した。これがあつては、この絵の詞書として印象が散漫になり、中心が定かでなくなる恐れがあるからである。この絵の主題は荒れ朽ちた邸と、庭一面の蓬生である。あの特徴的な姫君は、描かないほうが得策である。

ここで玉上（1960）が「描かないほうが得策」と言う「あの特徴的な姫君」とは、末摘花に関する容貌を指すと思われる。この論考で玉上は、「末摘花と言えば鼻と髪である」と言い、普賢菩薩の乗り物に喩えられた鼻とうるわしく長い髪について触れている（この特徴から、絵巻の絵画右端上部の女性は末摘花とは違い「侍従の叔母の少将」であるとする）。詞書では、末摘花が亡き父宮を思う様子や自身の不遇を嘆く様子、また容姿や行動の特徴的な様子は描かれていない。

他方、久下（1996:19）は、＜松にかかる藤＞に着目し、以下のような解釈をしている。

この絵のモチーフは、零落荒廃の象徴として、あるいは訪れる男のいないことを証す庭一面の蓬生だけでなく、むしろあえて言えば、玉上氏が一瞥さえしなかった＜松にかかる藤＞こそがモチーフ足り得ていると言えるのである。そしてこの＜松にかかる藤＞が、末摘花その人なのである。

久下（1996）は、＜松にかかる藤＞の「松」には「待つ」が掛けられており、「藤」は＜忍ぶ恋＞の象徴であるとして、＜松にかかる藤＞は末摘花の分身という。また「露」が涙の隠喩であり、末摘花の苦渋の涙だとする。そして、久下（1996:21）は、＜蓬生＞の主題を以下の

ように説明している。

なぜ絵師は源氏に右側から左側へと自らの意志として第一歩を踏み出させなかったのか。それは画面に描いてあるのが末摘花の見えない影であり、それこそがこの〈蓬生〉図の主題となる、待つ姿勢を貫く末摘花の堅固な志操と、苦難に耐える涙であったからである。

以上のような源氏物語絵巻の詞書と絵画、さらに源氏物語本文をどのように読み取っていくことが効果的なのか、その指導のあり方について次節で検討する。

(2) 源氏物語絵巻の詞書と絵画を活かした古典指導の展開

阿部(2021:27)は、古典の授業を転回するためのあたらしい指導過程を提案するにあたり、従前の古典指導との比較で以下のように述べている。

一語一文を順番に読み進めていく、あるいは場面ごとに読み進めるという授業は、現代文、古典をとおして極めて多い。表層の意味や文法を確認するならそれで済むかもしれないが、深層の読みに分け入っていくときには、そういう指導法ではすぐに限界がくる。何より、それでは文章や作品を読む喜びは生まれてこない。

阿部(2021)が言う「一語一文を順番に読み進めていく、あるいは場面ごとに読み進める」指導方法は、古典教育において継続して行われてきた指導方法である。しかし、冒頭でも述べたように、現代語との時間的・感覚的隔りがある古語・古文を言葉によって、言葉を言葉で理解させる指導方法には限界がある。阿部(2021:27)は、以下のような古典の指導過程を提案している。

文章や作品の全体構造を俯瞰するという指導過程が是非必要となる。構造を俯瞰すると、さまざまな発見が生まれてくる。古典嫌いは、この全体像がつかめないというところからもきている。構造というかたちで全体像が見えてくると、文章・作品の魅力が一層感じられるようになる。また、構造的に俯瞰することで、その文章・作品の重要箇所がどこであるかも見えてくる。全体が見えるからこそ、各部分の重要箇所が自然と浮き上がって見えてくるのである。

阿部(2021)の言う「構造を俯瞰する」点において、絵画を活用することには大きな利点がある。

絵画は平面上にさまざまな情報を有しており、それを視覚的に理解することが可能である。一方、詞書は、本文のダイジェスト版でもあり、絵画に添えられた説明的な言葉でもある。これらを活用することにより、源氏物語本文の内容の中核部分が理解しやすくなる。

源氏物語絵巻の詞書・絵画と源氏物語本文を照らし合わせると、表2の通り、絵巻の絵画、詞書、物語本文の順に描写される場面と内容が多くなっていく。それぞれの情報量の差は、学習の順序を考える重要な要件とも

なる。

阿部(2021:28)は、「構造の俯瞰」の後に続く段階について、以下のように説明している。

構造の俯瞰の次には、その「鍵」を中心に論理展開やレトリック、文法を含むさまざまな仕掛けを読み深めていく指導過程がくる。最後にその文章・作品の特長・よさ・魅力を発見し、違和感・弱点・問題点を明らかにしていく評価・批評の指導過程となる。そこには批判的な読みも含まれる。

このような全体構造の俯瞰から始まり、徐々に論理展開や文章の仕掛けを読み取っていき、作品そのものの魅力や問題点に向き合う読みにまで発展させていきたい。そこで、図2のような展開を考えた。

最初に「蓬生」場面の絵画をもとに、この場面を構造的に俯瞰し、「場所・場面」「人物」の行動等について視覚的に読み取り、交流する。次に詞書から「時」「場所・場面」「人物」の行動と心情について言語的に読み取り、絵画と詞書を対照させることでさらに読みを深める。ここで、目の前の荒れ果てた邸内にいるであろう末摘花について、絵巻の絵画でも詞書でも描かれていないことに気づかせたい。末摘花の様子についてはさまざまな想像や考えをめぐらすことになるが、末摘花の暮らしぶりや人物像について読み取る検証材料となるのが源氏物語本文である。表2の「源氏物語」蓬生巻本文中の見出しを参考にしつつ、本文書かれている具体的内容を読み取っていく。「4. 結果」の「(3) 源氏物語「蓬生」本文の読み取り」で示した通りの本文等から末摘花の暮らしぶりや人物像を具体的に読み取ることができる。それをもとに、〔発展1〕として絵巻では末摘花が描かれなかった理由について、学習者自身が主体的に考えてみる。これは、阿部(2021)の言う「違和感・弱点・問題点を明らかにしていく評価・批評の指導過程」ともいえる。また、〔発展2〕として、「蓬生」巻本文の最後の場面を読み、「源氏」が「末摘花」を生涯にわたり手厚く庇護した理由について考えてみたい。表2の「源氏物語」蓬生巻本文中の見出しでは、「(13) 源氏、末摘花を手厚く庇護する」「(14) 末摘花、二条の東院に移り住む」にあたる。これは、国宝「源氏物語絵巻」蓬生の場面からすると、後日譚になる。その時間的経過を源氏物語本文では読み取ることができる。絵巻の絵画・詞書、物語本文のそれぞれの特長を生かしながら、古典指導に位置付けていきたい。

6. まとめと今後の課題

本研究では、最初から言語情報をもとに古典学習をスタートするのではなく、絵巻の絵画による視覚情報を手がかりとして詞書を読み進め、詞書の中から描かれていない点を発見し、それをもとに源氏物語本文へと向かう流れを提案した。

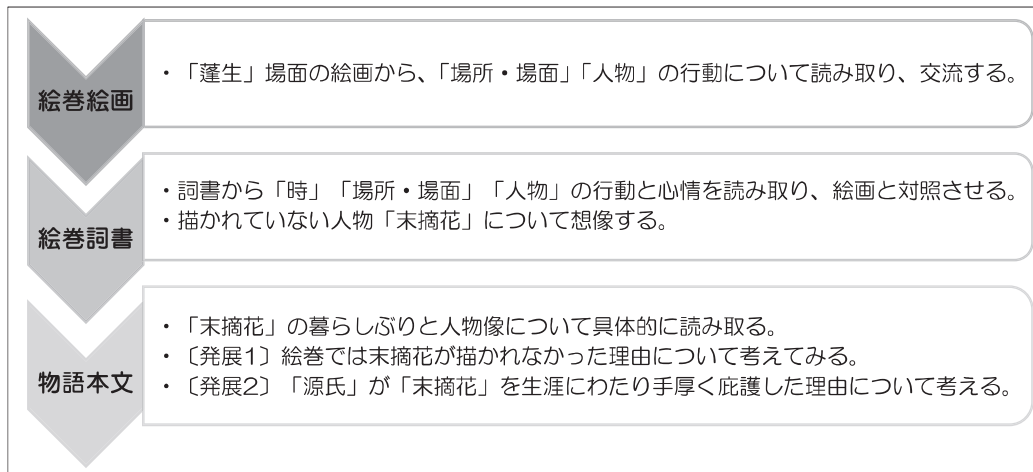


図2 源氏物語絵巻「蓬生」場面の詞書と絵画を活かした古典の指導過程

以上をもとに、本研究における源氏物語絵巻の絵画と詞書を活かした古典指導の特徴をまとめると、以下のようになる。

- (1) 絵巻の絵画による視覚情報を起点として、言語理解への流れを作ることができる。このことにより、絵巻の絵画が視覚に訴えかけ、言葉の学習の前に、全体構造を俯瞰する役割を果たすことが期待できる。
- (2) 絵巻の詞書により概要を理解し、詞書の言語情報によりポイントを絞って物語本文へと読み進めていく足がかりを作ることができる。

今回は国宝「源氏物語絵巻」の蓬生の場面の絵画と詞書および源氏物語本文をもとに古典指導の展開を検討した。今後は、蓬生以外の巻や場面においても、絵巻の絵画と詞書、源氏物語本文を繋いでいく学習プログラムを考案していきたい。

<文献>

- 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男 校注・訳(1998) 古典セレクション 源氏物語② 若紫・末摘花・紅葉賀・花宴, 小学館。
- 阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男 校注・訳(1998) 古典セレクション 源氏物語⑤ 蓬生・関屋・絵合・松風・薄雲, 小学館。
- 阿部昇(2021) 読解力を鍛える古典の「読み」の授業—徒然草・枕草子・平家物語・源氏物語を読み拓く—, 明治図書。
- 秋山光和(2000) 日本絵巻物の研究 上, 中央公論美術出版。
- 久下裕利(1996) 源氏物語絵巻を読む—物語絵の視界, 笠間書院。
- 迎山和司(2022) 人工知能と芸術—試行を元にしたヒトの認知と表象の理解—, 電子情報通信学会 基

- 礎・境界ソサイエティ Fundamentals Review, 15巻4号, 電子情報通信学会, 281-290。
- 中村義雄(1954) 源氏物語絵巻の詞書について, 美術研究, 174号, 67-80。
- 清水婦久子(2011) 国宝「源氏物語絵巻」を読む, 和泉書院。
- 玉上琢弥(1960) 隆能源氏絵詞「蓬生」鑑賞, 國文學, 29号, 関西大学国文学会, 67-75。
- 徳川美術館(1995) 新版 徳川美術館蔵品抄②源氏物語絵巻, 徳川美術館。
- 渡部泰明(2018) 古典に参加する一高等学校『古典探究』をめぐって—, 日本語学, 第37巻第12号, 明治書院, 144-154。
- 山田丈美(2022) 源氏物語絵巻の詞書(ことばがき)と絵を活用した古典指導プログラムの開発 その一—絵巻の文学性の検討—, 全国大学国語教育学会 国語科教育研究: 大会研究発表要旨集, 143号, 全国大学国語教育学会, 177-180。
- 山田丈美(2023) 源氏物語絵巻の詞書と絵画を活かした古典指導の研究—「橋姫」の場面を中心に—, 中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要, 第24号, 中部学院大学, 43-53。
- 横井健(2019) 高等学校「古典B」—和歌を主体的、対話的に学ぶ試み— —「ほととぎす」「雁」を手がかりに—, 研究紀要, 第46号, 愛知教育大学附属高等学校, 1-7。

【謝辞】

本研究は、JSPS 科研費22K02560の助成を受けている。本稿は、第145回 全国大学国語教育学会信州大会での口頭発表の内容を骨子とし、再検討・再構成したものである。研究を進めるにあたり、元国立国語研究所所長の甲斐陸朗先生にご助言を賜った。ここに記して感謝申し上げます。

A Study on Teaching Classical Literature Using Explanatory Notes and Illustrations from the Tale of Genji Scrolls : Focusing on the “Yomogiu” Chapter

Takemi YAMADA

Abstract : The lyrics in the Tale of Genji picture scrolls serve to provide preliminary linguistic information for the subsequent pictorial scenes by summarizing or excerpting text from the Tale of Genji. Conversely, the paintings in the scrolls offer visual representations of selected symbolic scenes. This study examines how classical literature instruction can leverage these aspects of the Tale of Genji scrolls' lyrics and paintings, specifically focusing on the “Yomogiu” scrolls. Recognizing that the number and content of scenes described increase in the sequence of picture scroll, lyrics, and text of the tale, we propose an instructional process. This process begins with understanding the visual overall structure of the picture scroll, followed by exploring the lyrics and text of the Tale of Genji to enhance content comprehension.

Keywords : classical education, Tale of Genji picture scroll, lyrics, paintings, Yomogiu